

円山応挙の写生 — 人形、見世物、春画との関係

加藤 弘子 (東京藝術大学)

本発表は、円山応挙の写生の実態を鳥獣と人物の写生図を中心に確認するとともに、今後の研究の方向性を提示するものである。

応挙の「典型を求める写生」や「部分写生の合成」、そして「徹底した細部描写」については、彼の本画すなわち「写生画」の特徴として、佐々木丞平氏など先学によって指摘されている。

たしかに応挙は「写生図から本画へ」という直線的な制作過程をとっていない。「琵琶湖宇治川写生図巻」(京都国立博物館蔵)に「初雁」「帰雁」という異なる季節の雁の姿が同時に写されている事実は、応挙が既に写生図制作の段階で飛び交う雁に「典型を求める写生」を行っていたことを示し、本画では雁の動きを強調して現実にはありえない姿勢に改変して花鳥画の典型美を実現している。また、重要文化財の「牡丹孔雀図」(相国寺承天閣美術館蔵)には、雌の羽根に雄の蹴爪を持つ孔雀が描かれ、対象を解体した部品レベルで「部分写生の合成」が行なわれていたことが確認できる。そして「徹底した細部描写」については、毛描きや隈取りの際に筆や描法を使いわけ、表面描写へのこだわりがみられる。

こうした特徴は鳥獣に限らず、人物の場合も同様である。「人物正写惣本」(天理大学附属天理図書館蔵)には、男女、年代、貴賤別に典型的な人物像が登場し、細かな彩色の指示には、肌や髪といった身体の表面描写による描き分けに心血が注がれていたことがうかがえる。

また、これまで「人物正写惣本」は実在の人間をモデルに写した写生図と考えられてきたが、はたして本当にそうであろうか。他の作品に共通する顔貌表現、一部の人物像の不自然な姿態や留め書きとの矛盾、人形のような身体観や髪型からみて、特に全身像に関しては「部分写生の合成」によって創作された可能性が高い。円満院門主祐常『萬誌』の記述を厳密に再解釈した結果、相書を基本に、見世物の人形と身体各部の写生が合成された、画手本としての写生図であったと考えられる。

それを裏付けるかのように、三井南家伝来の模本「人物正写惣本」(個人蔵)には、春画3点と、人物画を学ぶ画本として制作した旨の奥書が確認できる。性器の部分図には容赦のない現実感溢れる描写があるが、それらが春画の全身像に移行する際には図像情報は抑えられ、一定の理想化が行なわれている。

先学が指摘する奉公時代の人形や眼鏡絵との関わりに加え、応挙には馴染みの場所であった四条河原の見世物や、『古画備考』に「其写真を極む」とまで評された円満院時代の春画制作は、今後、彼の写生の展開を考察する上で看過することはできない。応挙の写生は、天皇や公家、武家双方の庭園で流行した等身大人形の造り物や、四条河原の細工見世物、春画といった虚構と現実が交錯する造形と密接に関係している。応挙の写生をこうした多様な都市の視覚文化の中で見直すことは、今後の研究のひとつの方向性として有効なのではないだろうか。